蓮如信仰の一考察(四)

阿部法夫

前回において、穴馬における順村という行事の概要をスケッチし、あわせて「オソーブツ」との関連性をながめてきたところであるが、次に穴馬九ケ同行の歴史的なものを見ていきたい。

「いずみ村の伝説と民話」・「いずみ村の生活文化」（いずれも和泉村教育委員会発行の『ふるさと和泉』の分冊である）において、〝九ケ道行（ママ）とは〟と題された次の一文が載せられている。その文面はほぼ同じなので、ここでは後者の「いずみ村の生活文化」の方を引用していこう。長文となるが、筆者として興味深い所を解説していく形で進めていきたい。

毎年一月十一日頃になると、ホービキ（抽せん）によって順番の定められた二人の村人達が本山参りをする。これを役参りと言った。

九ケ道行[A]とは、越前では、伊勢・荷暮・久沢・大谷・下半原・西谷の秋生・美濃では、大間見・為真・川辺の計九ケ村を美濃越前九ケ道行といった。

役参りが当たると人々は、信玄袋（物を入れる布袋）に身の周りのものや、本山へ奉納するまわた・おさいせんなど入れて、わらじの上につまがけをはき、ござと五郎平傘をかぶって出かけた。……旅費や宿代は村の頼母子講[B]によってまかなわれ、その年参れない人は他の人に代って参ってもらった。九ケの裃九枚は、京都遍昭寺[C]にあづけてあるので、人々はそこでかみしもをつけてお参りした。

一月十四日は、親鸞の御正忌報恩講[D]である。……九ケの人の中で、りんずか（りん棒）を取る人[E]が、一番前に一人だけ座り、後の八人衆はその後に並び、その後に本山の坊さんがずらりと並ぶ。その次は一般参拝者である。「りんずか」を持つ人は、九ケ道行に限られていた。九ケ道行は格式の高い道行として、本山では丁重にあつかった。法要が済むと、お時[F]につく。上人はおときのおぜんには箸をつけず、九ケへ払い下げられる。[G]全ての行事が済むと、九ケの人達だけは宝物殿へ案内され、拝観を許された。

九ケとは、昔、顕如上人の時代に本山が信長から退去を命じられた事があった。それで仕方なく紀州鷺の森へ御退去になった。その際、糧道をたたれて、なんぎをされた

為、遍照寺が、九ケの人々に呼びかけて勧誘したので、九ケの人々は、いち早くまわた・ひえの実・あわの白米などを持ってはせ参じ、「一向一揆」に加わった。[1]その功により美濃越前九ケ道行は、格式の高い道行として、末代までも丁重にあつかわれた。

役参りが終って、人々が帰って来ると、又白鳥や平島（村はずれにある地名）あたりまで出迎えに行き、人々は労をねぎらった。あくる日朝じ（朝の勤行のこと）が済むと、道場でかち〳〵になった御前様（仏に供えたご飯のこと）や、ひじき・がんもどき・松風（菓子）などが上人のおわけとして少しづつ村中へ配られた。人々は「もったいないのー」と何度も〳〵もいなだいて（おしいたゞく）家へ持ち帰り、湯にもどして食べた。その他、銭別をもらった人々には、別にローソク・線香・じゅず・打敷・五色豆・八ツ橋など京参りの土産として配られた。また、顕如上人の絵姿は二ケ月毎に九ケの村々を廻り、この時、村人たちは天気がよくても、かならずみの・かさをかぶって送り迎えをした。[1]……

解　説

（A）、九ケ道行……〝道行〟という語は、正しくは〝同行〟と書くべきである。文中すべて誤ったまま〝道行〟と記しているので、あえて訂正せずそのままにしておいた。

〝同行〟とは、文字通り「行を同じくする者」あるいは「共に同じ行を修する者」と解することができる。この場合の行とは、もちろん念仏すること、称名することである。同様の意味あいで〝同朋〟という語もある。[2]

このような「御同行御同朋」という精神は宗祖親鸞が「弟子一人モモタス」（『歎異抄』第六条）と述べられたことに始まるが、蓮如もこうした門徒への対応をよく受け継ぎ、門徒の人々を大切に扱い、先例を破って平座の対話で心を割って語り合い、そうした親しみやすさの中で信心をとらせたり、仏法讃嘆の時に門徒を〝御方々〟と呼んで大切にしなさいと取り巻きの門弟たちに注意している[3]ほどである。

なお、この書における九ケ同行の構成と、前回で述べたところの千葉乗隆氏・坪内晋氏の著書・論文での構成を比べてみると、そのほとんどは同じではあるが、例えば「神路」の村名が見えないものがあったり、「川（河）辺」がないものがあったりして、微妙にくい違いがあることに注目しよう。現代にあっても、約四〇年間においてなお若干の巡回地の異同があり、この間の変遷を見つけることができるのである。

（B）、頼母子講……西本願寺において一月に勤まる御正忌報恩講への参加（九ケ同行の間では〝役参り〟と誇らしげに言っている）は、彼らにとって最も大切な、また、最大の年中行事であったのだろう。そのため、「本山参拝頼母子講」を結成して、その講金を旅費や宿泊費に充てている村があることを千葉氏は報告している。その講の規約には、「毎年一月一三日本山へ参拝シテ報謝ヲイタサンガ為」に「年々巡番ニ集金ス」ることになっており、「参詣ハ抽籤」で決定して、「毎年二人参拝ス」ることになっている、などなど簡単な取り決め事項が並んでいる。[4]

（C）、遍昭寺……この文の後ろでは〝遍照寺〟とも記しているが、そちらの方が正しいと思われる。

坪内晋氏によれば、遍照寺の唯宗という人物が穴馬の同行たちを糾合して、石山合戦の折、顕如への忠節を尽したようである。そして、同寺は西本願寺近くの京都市下京区中筋通り六条下ル学林町にある[5]ということであった。

石山合戦の最中、穴馬九ケ同行の手次の寺ではなくして、なぜ京都の西本願寺近くの遍照寺が直接彼らを糾合し、勧誘できたのか。すなわち、どのような理由で顕如への取り持ちをしたのかは、現在の所不明であるが、顕如と遍照寺唯宗との結がり（遍照寺が元々本願寺の家臣団の一員であったのか、また、石山合戦時のみの武力的家臣であったのか、今の所想像するのみである）から、直接に地方門徒への参戦あるいは応援の依頼となったものであろう。

ちなみに、「京都市の地名」（『日本歴史地名大系』27、平凡社）の学林町の項を見ると、遍照寺の寺名とその略由緒が記されている。次に引用して、現地調査の責任を一時果たしておく。

（前略）「京町鑑」には、「此町に仏照寺・一行寺・光照寺・遍照寺・蓮光寺・宝山寺・西教寺、いづれも西門徒也」とあるが、仏照寺・一行寺は現存しない。

現在当町には、遍照寺・聞光寺・祐西寺・光照寺・常楽寺・蓮光寺の六ケ寺がある。遍照寺は寺伝によれば、後一条天皇の長元元年（一〇二八）、山城国久世郡岩田村（現京都府八幡市）の地に僧皇慶が開基、当初は天台宗、後に浄土真宗に改宗し、天正一九年（一五九一）西本願寺建設の際、現在地に移転、寛永一八年（一六四一）に遍照寺と称した。[6]（以下、各寺伝は略す）

「京都市の地名」の解説によれば、学林町という地名は西本願寺の学林（僧侶の教育機関、現在の龍谷大学の前身）が設置されたことより起った。ここには、西本願寺寺内町の一つとして寺内九町組を形成していた。

遍照寺は、現在地西六条に西本願寺が建てられた頃に、故地山城国久世郡より移転されたものであるが、石山合戦時の地方門徒の勧誘・糾合といった功績によって、西本願寺のお膝元に召されたものであろう。

（D）、報恩講……報恩講は真宗の寺院住職にとっても門徒にとっても最大の年中行事である。

本願寺にあっては御正忌ともお七昼夜ともいわれ、祖師親鸞の忌日に報恩のために行なわれる最大の仏事である。本願寺三世の覚如が『報恩講式』を著わしてから形式を整え、御報恩念仏会とも呼ばれ七日間厳修された。

宗祖親鸞の忌日は旧暦十一月二十八日で、太陽暦に換算して一月十六日に当たる。そのため、現在西本願寺では一月九日から十六日までの一週間に報恩講が勤まり、東本願寺においては十一月二十一日から二十八日の七日間執行される。末寺、道場にあってはそれ以前に予修されることが多く、引上会・御取越とも呼ばれている。[7]

また、特に大谷派の門徒農民にあっては農じまいの収穫祭の時期に当っており、無事収穫を終えて、一年間の農耕生活を見守ってくれた祖先に対する感謝の意識が、宗祖親鸞に対する報恩謝徳の宗教行事として表出してくる一面[8]を見逃してはならないだろう。それは、永代経における予祝祭の性格とあわせて、浄

土真宗における民俗性を知る好材料の一つである。

（E）、りんずかを取る人……〃りんずか〃とはりん棒のことで、〃りんずかを取る人〃とは勤行における調声をとる人を指し、いわゆる「御頭人」のことである。

「御頭人」というのは、報恩講の初夜の座における斎・非時の勤行のとき、正信偈の調声人をつとめる役目である。[9] この時は、僧侶ではなく在家の者すなわち穴馬九ケ同行の人々が毎年交替で調声を勤めるのであるが、

この同行衆は十余人、むかしながらの裃姿で、寒気殊にきびしい祖師前で、声高々と正信偈を勤修した。[10]

と、本山側の記録に今もなお登場するほどであった。

また、穴馬九ケ同行は〃裃の同行〃として西本願寺においては優遇されており、「すべての名列の最初は九ケ講であり、門跡との斎・非時相伴を許され、最上席であった」[11]と言わしめるのであった。

報恩講における「御頭人」は、すでに蓮如の時代から固定化したようで、山科本願寺時代には斎・非時の願人による勤行が行なわれていたことが『山科御坊事并其時代事』に、

（前略）斎の頭人のつとめは太夜（逮）より前に非時過て候。頭人の勤果候へハ、やかて太夜の鐘なり候。非時の頭人のつとめは太夜過て讃嘆の前にあり、讃嘆は五時まてあり。近年は宵の談合の前後に斎・非時の頭人の勤あり。[12]（後略）

という文で表現されている。

さて、「御頭人」には単に勤行の調声をとるという役目の他に、当日の斎・非時の設斎費用（いわゆる饗応接待の費用）を負担し、斎・非時を相伴する役目もあったのである。こちらの比重が大きかったものと思われる。

そもそも、「頭」とは荘園制社会の頭（当）役にその起源を有するが、戦国時代の本願寺において畿内とその周辺地域の直参寺院や直轄講に課せられていた公事の一形態である。頭人の寺院や講中は、当初、摂津・河内・大和・近江・越前・美濃・尾張地方の直参集団から上番させられていたが、後に加賀・三河・飛騨・若狭・伊勢と興正寺門徒が加わった。これらの頭人は、報恩講をはじめとして、歴代宗主の命日、宗祖・前宗主の毎月両度の忌日の斎・非時に交替で出仕している。また、それぞれ輪番で費用を担う組織が形成されていた。なお、大谷派では江戸時代にすでに衰退しており、本願寺派でも形式化しつつも継承してきているところである。[13]

（F）、お時……正しくは〃お斎〃と記すべきである。しかし、「御時」と記した古記録の例もあり、[14] こうした表現でもよいのかも知れない。

「お斎」とは、仏事のときにする食事で、元来は午前中の食事を指す。それに対して、午後の食事を「非時」といった。[15]

お斎・非時のとき食事をして、信心の談合の場としたのも蓮如の頃より始ったものであるが、食事と勤行・説教をセットにした儀礼形態は、神社行事における「直会（ナオライ）」として、民間における各種の講行事の講汁として、あるいは諸寺院の庶民的な法会における共同飲食としての宗教行事の民俗性・庶民性・集団性を如実に示すものである。蓮如以降の本願寺教団は、このような意義を吸収し、法脈と血脈とを一身に相承した善知識としての宗主

と末寺・門徒農民とが共に食事をすることにより、お互いの結びつきを強め、如来の恩や師主知識の恩に対する報謝の念を深い感動とともに体験するという真宗的な意味転換をおこなった。さらに年中行事として毎年繰返すことは、個人が何度も宗教的感動を起こし、集団としての真宗信仰が永続していくことにつながっていくと思われる。[16]

このような情景は本山のみに止まらず、全国各地の末寺にあっても見い出せる。報恩講のお説教の後、油揚・大根・人参・黒豆・豆腐などの材料をもとにした昔ながらの料理を参詣の人々が大勢で会食し、あちこちで信心の話に花を咲かせ、大いに談笑する姿は、真宗の法義相続の具体相を見る思いである。

(G)、おぜんを九ケに払い下げる……これは穴馬九ケ同行の由来の消息に見える故事からきているのであろう。顕如が報恩講の食事の御相伴を駆けつけた九ケ同行に申し付けたという。顕如は自身のお膳も分け与えたのであるが、蓮如が一生涯をかけて続けてきた、門徒を大切にし、門徒＝民衆の心を握んだ生き方の継承が見られると考えられる。

笠原一男氏によると、蓮如は「遠国から上洛してきた大坊主衆はいうまでもなく、俗人の家の長男にも、本願寺の御亭において、いっしょに魚で食事をなされた（『本願寺作法之次第』）」り、「人に御酒や物をくだされて、有難いことだと思わせて自分に近づけさせ、仏法の話をしてきかせた。だから、このように物をあたえることも信心をとらせるためだと思えば、それを仏恩報謝と考えているのだと仰せられた[17]（『実悟旧記』）」ということであるが、そのような蓮如の考え方、姿勢は歴代宗主に順次受け継がれていき、顕如も同様の行動を取らせたといえるであろう。

それは、蓮如というカリスマ性を有した人物の後継者達すなわち世襲的カリスマにあっては、その行動様式が形式的にでも受け継がれていくことを表わすと見てよいだろう。

(H)、いわゆる九ケ同行の由来……ここでは、顕如の時代より穴馬九ケ同行の本格的な歴史が始まるとしているわけだが、この由来と同根と思われる伝承を本山側も是として受け取り、昭和三十一年三月一日付の西本願寺門主勝如消息に次のように語っている。

美濃・越前九ケ村同行講の方々には、その昔、慶長（天正）の頃、織田信長兵乱のおり、顕如宗主紀州鷺の森へ御退出のとき、糧道を絶たれ、頗る御困難の際、遍照寺唯宗、美濃・越前九ケ同行を勧誘し、真綿ならびに糧米を運んで、その危急をお救い申上げ、時に報恩講中であり、宗主は深くその意を嘉せられ、非時御相伴を申し付けられたという護法の由来を縁とし[18]（以下略）たというものである。

以上、穴馬九ケ同行の歴史・縁起等について、蓮如信仰という観点から少しく探ってきたところである。

さて、上述してきた二つの「レンニョサン」と穴馬における順村については、門徒側（民衆側・庶民側と言い換えてもよいだろう）すなわち俗よりながめた蓮如信仰の諸相であると規定できるところである。次に、それと対称的位置にある布教者側（寺院側・坊主側あるいは宗教的支配者側とでも言おうか）すなわち僧より見る蓮如信仰について論を進める必要があろうが、ここで「レンニョサン」

と穴馬の順村について別の観点からおさえておかなくてはならない。

木場明志氏は、真宗習俗の研究方法として寺院主催型儀礼行事と門徒主催型儀礼行事とに分けて、現行の真宗習俗を分析することの有効性を主張されたが、[19] それを軸として考えていきたい。

まず、穴馬における順村について見てみよう。この順村においては門徒主催型の性格が強く出ている。例えば、穴馬では僧侶の存在がなく、僧・坊主は行事運営にタッチしていないのである。ただ、道場役という僧侶的身分の者が運営に当っているが、この道場役を僧・坊主に含めるかどうかで判断が分かれてしまうところである。筆者はあくまで道場役を門徒側の代表者と見るものである。地理的理由で正式な僧侶が来住することがないために、臨時に道場役が代行せざるを得ない状態にあり、「回壇」のように僧侶がまわって来て報恩講などの真宗行事を執り行なう正式なものがある（現在はこれすら衰えてきているという）からである。

また、頼母子講に象徴されるようにその構成員によって運営費（本山への志納金および本山参りに必要な費用が大部分を占めていると思われる）が賄われていることも門徒主催型の行事であるといえる。

さらに、「蓮如さま」を運ぶ者が穴馬の各部落内から選ばれていたことも、門徒主催型の行事であることを裏付けるものである。

つぎに、二つの「レンニョサン」についてみてみよう。これらの行事の主体者は誰なのかを考えると、結論的には門徒側に主導権があるのではないだろうか。「レンニョサン」は、東西両本願寺の吉崎別院の大きなドル箱となっており、別院収入の大部分を占める。法要の部分は僧侶でなければならないが、あくまで蓮如御影を携えて巡行する門徒（その責任者が宰領と呼ばれる門徒の中から選ばれた人物である）にこの行事を主宰する権限があると見るわけである。

ただ、大谷派の「レンニョサン」の立寄所の一部に蓮如ゆかり（それが史実であっても伝承・伝説であっても構わない。伝承して来た人達にとってはそれが真実であったのだから）の寺々があることは、以上の規定を少し破るものであると考えなくてはならないだろう。蓮如の絵像を迎える側の寺院にあっては、すでに慣例化し年中行事の一つとして定着している例も見られる。自分の寺が「レンニョサン」を実施・運営しているという自負が生まれても不思議ではないであろう。また、お立寄りを機に蓮如上人の書かれた六字名号（これまた、蓮如の真筆であろうとなかろうと構わないことは言を待たない）や蓮如上人絵伝などの寺宝が開帳され、参詣の人々に拝ませるような寺院も出現することになる。

このように、大谷派の「レンニョサン」にあっては寺院主催型のパターンも混在せざるを得ない状況であったといえる。すなわち、その寺院がその地域の一つの宗教的拠点として、参集してくる門徒達の蓮如への崇拝の念を育てていき、門徒の蓮如信仰の表明の場としてあらわれていくのであろう。

一方、本願寺派の「レンニョサン」にあっては、別院の世話方がその中心となって当年の立寄所を選んでいる。その方法は巡回予定地域の門徒側よりの前々からの希望をも取り入れて決定されていく。その中には毎年決め

られた立寄所も含まれている。巡回予定ルートは毎年少しづつ変わるため、順路の決定にあたって別院職員と緊密に相談しながら、そこに関与している世話方が中心となって決定していく。すなわち、門徒主催型の性格が出ているとみてよいだろう。

「レンニョサン」全体をながめる時、いずれの派においてもその主流は門徒主催型の行事であることには変わりがないと言えるのである。

以上、現在の運営状況あるいは発表された時点での状況からの判断として、穴馬での順村と「レンニョサン」の性格づけを思いつくまま断片的に素描し、分析を試みたところである。

注

(1) 「いずみ村の生活文化」（『ふるさと和泉』の分冊） 一二三～一二四頁。
また、「いずみ村の伝説と民話」（九四～九五頁）にもほぼ同文のものが載っている。
なお、引用文中の「……」は省略を意味する。

(2) 『真宗新辞典』 三六九頁。

(3) このような蓮如の門徒への接し方については、没後間もない頃より、彼の子息たちや昵近の門弟たちによって著わされた数多くの語録・言行録といったものに見つけることができる。参考のため、その幾つかを引用しておく。なお、理解しやすいように漢字を付した。
①仰ニ、身ヲステ、平座ニテミナト同座スルハ、聖人ノ仰ニ四海ノ信心ノヒトハミナ兄弟ト仰ラレタレハ、ワレモソノ御コトハノコトクナリ、又同座ヲモシテアラハ、不審ナル事ヲモトヘカシ、信ヲヨクトレカシトノネカイナリト仰候キ。
②仰ニ、オレハ門徒ニモタレタリト、ヒトヘニ門徒ニヤシナハル、ナリ、聖人ノ仰ニハ、弟子一人モモタスト、タ、トモノ同行ナリ、ト仰候キトナリ。
以上『第八祖御物語空善聞書』
これらは『真宗史料集成 第二巻 蓮如とその教団』四三二頁に載るものである。
③仏法ノ讃嘆ノトキ、同行ヲカタ〳〵ト申ハ平外也。御カタ〳〵ト申テヨキヨシ仰コトニ候ト云云。
④同仰云。御門徒ヲアシク申コト、ユメ〳〵アルマシク候。已ニ開山ハ御同行御同朋ト御カシツキ候ニ、聊爾ニ存スルハクセコトノ由仰ラレ候キ。
以上『蓮如上人一語記（実悟旧記）』
これらも『真宗史料集成 第二巻』に、③は四六三頁に、④は四六六頁にそれぞれ収録されている。

なお、これらの条文は、その他の言行録類も含めて、笠原一男氏によって「蓮如の論語」として現代語訳されているので参照されたい。『不滅の人・蓮如』一八九～二〇五頁。一九九三（平成五年）刊、世界聖典刊行協会。

(4) 千葉乗隆著『中部山村社会の真宗』一六四頁。
なお、千葉氏は美濃の上神路での調査を発表されているが、「いずみ村の生活文化」においては越前荷暮のものとして紹介されているところである。

(5) 坪内晋著『白山山麓の真宗発展と道場の研究』五〇～五一頁。
遍照寺の唯宗と穴馬門徒との関係については、千葉氏も重松明久氏もそれぞれの著作に触れられている。

(6) 『京都市の地名』「日本歴史地名大系27」 平凡社 一九七九（昭和五四年）刊、九六三頁。

(7) 『真宗新辞典』四四〇頁。

(8) 故佐々木孝正著『仏教民俗史の研究』二六二頁。

(9) 千葉氏前掲書一六四頁。

(10) 経谷芳隆著『本願寺風物誌』三六頁、永田文昌堂、平成二年刊。その初版は昭和三二年。度々改訂を経ているが、昭和三〇年代の記録であったとみてよい。

(11) 坪内氏前掲書五〇頁。
なお、坪内氏は「袴の同行」と呼ばれていたとす

る。表記上の誤りかと思われるが、裃（かみしも）は、肩衣（かたぎぬ、上に着ける）と袴（はかま、下に着ける）を同じ色で染めたものであるため、袴と裃をほとんど同じ意味あいで使われたものと解してよいと思われる。

(12)『真宗史料集成　第二巻』五四七頁。

(13) この頃、『真宗新辞典』三六八・三七三頁などの解説によった。

(14) ちなみに『第八祖御物語空善聞書』には次のように記している。

廿二日朝ノ御時（斎）、浄恵、福田寺……

廿三日御時（斎）、本遇寺。……

廿四日御時（斎）、道顕。……

『真宗史料集成　第二巻』四二〇頁。

(15)『真宗新辞典』六三頁。

『本願寺風物誌』にはこのお斎・非時に関して次のような興味深い記述がある。

この斎・非時の料理は古来の風儀があって、遠方の同行が持ち帰って、参らなかった近所の人々にも、配っていたゞかれるように、調理がしてあって、昔から焼豆腐などを蒿にくくって、持ち帰る同行もあったなどゝ言い伝えている。

（同書　四〇頁）

これは、次項で載せる〝おぜんを払い下げる〟ことを料理人側から支え続けてきたことを表わすものである。

(16) この項、故佐々木孝正氏『仏教民俗史の研究』二〇四頁によった。

(17) 笠原氏『不滅の人・蓮如』一九九～二〇二頁。

(18) この消息は、注（5）でも触れたが、「千葉氏」『中部山村社会の真宗』（一六三頁）・「重松氏」『穴馬の民俗』（一〇三頁）・「坪内氏」『白山山麓の真宗の発展と道場の研究』（五〇頁）などにそれぞれ引用されているものである。

(19) 木場明志著「真宗と習俗信仰」『北陸の民俗』第六集所収、平成元年刊。同著一三頁。